

「悲劇繰り返さないで」

「原爆の日」 広島で式典 本県遺族代表参列



「核なき世界」の表現を願い、原爆死没者慰霊碑に祈りをささげる川本司郎さん(右)と悦子さん
11日午前、広島市中区の平和記念公園

広島は6日、71回目の原爆の日を迎えた。オバマ米大統領の訪問から2カ月余り。被爆地への関心が高まる一方、核兵器廃絶の道のりは長く険しい。「決して悲劇を繰り返してはならない」。本県の遺族代表として平和記念式典に参列した川本

司郎さん(79)は静岡市清水区。原爆死没者慰霊碑に祈りをささげ、「核なき世界」の実現に願いを託した。あの日、8歳の川本さんは爆心地から2・3キロで被爆した。兄たちと川に水浴びに出掛け、軍用鉄道の鉄橋の上でいた。西の空が光

り、大きな火の玉が上空に昇っていった。思わず線路の上に身を伏せた。周囲は爆風とほこりでも見えない。真っ暗闇だった。髪が燃え、手足にやけどを負った。爆心地

援に力を注いできた。オバマ氏は被爆地・広島に歴史的な一歩を刻んだ。「世界の首脳が広島を訪れる道筋を作った」と評価する一方、今なお核兵器が世界を脅かしていることに歯がゆさも感じてい

を言い出した以上、責任を持って削減目標を示してもらいたい。被爆者健康手帳を持つ県内の被爆者は、7月末時点で572人。10年前に比べ3割以上減った。被爆体験の風化が懸念されるが、頼もしい動きもある。今

年1月、親世代が担ってきた体験や核廃絶の取り組みを継承しようとする「被爆2世」による組織が結成された。原爆投下から71年。初めて長女悦子さん(42)とともに式典に参列した。「被爆者に残された時間は少ない。一度広島に娘に来てもらいたかった」と川本さん。悦子さんは多くの若者や外国人を目の当たりにし、「父たちが取り組んできた草の根の平和の運動が広がっていると感じた」と語った。(社会部・森田憲吾)